



NPO 法人マザーズサポーター協会では、納得のいく「今」を生きるために、お役に立つ情報を発信しています。

今回のニュースレターは、名古屋支部の奥野が担当します。私には、現在 29 歳の長女と 28 歳の長男がおります。今は、二人とも独り立ちし、それぞれが職業に就き、充実した生活を送っております。長男は妻と二人の子どもとともに、すでに家庭を築いております。今では家族と幸せに暮らす長男ですが、彼の高校時代にある出来事が起こりました。

〈道を外しかけた息子〉

長男のマコトは、中学の時、卓球で全国大会に出場するほどの実力のある卓球選手でした。当時は毎日の朝練と放課後の練習、そしてそれが終わると友人たちと近所の体育館に出かけ、閉館まで練習に励むといった毎日を送ってまいりました。その甲斐あってか友人たちとともに団体戦で地区予選に優勝し、愛知県大会を勝ち抜き、見事、全国大会の切符を手に入れました。日々の練習と週末は各地を遠征する息子の送迎を通して、我々夫婦は息子の成長を肌で感じる事ができました。

ところが、高校受験に際し、マコトは県内で一番の卓球の名門高の受験を避け、そこそこ卓球が強いと言われる近所の公立高校への進学を決めます。大丈夫と思われた受験でしたが、まさかの不合格。滑り止めとして受験していた近所の私立高校に入学した彼は、迷わず、卓球部への入部を決めました。

ただ、その卓球部は無名で地区予選、万年 1 回戦敗退の弱小チームでした。それでも、あきらめることなく、卓球を続ける息子でしたが、ある日を境に、生活に変化が現れます。髪を茶髪にし、学校の同級生とともに繁華街を徘徊し、夜、遅く帰るといいう日が続きました。どうやら地区予選で一回戦敗退を期し、それ以降、部活には行っていないようでした。家庭でも妻や姉に暴言を吐くようになり、家庭が荒れる兆しが見えてきました。当時、仕事に忙殺されていた私はそんな家庭の状況にも気づかずにおりましたが、ある日、妻からマコトの生活が荒れ、不良たちとの遊びが増えていることを知りました。

それでも、中学のとき、あそこまで真剣に卓球に向き合えたマコトがそう簡単に卓球を捨てるはずがないと考えた私は、彼を特に注意することなく、毎日を送ってまいりました。たまたま、会社から早く帰宅したあの日、マコトがリビングのソファに寝そべって妻に何か話かけていました。「自分が勝てないのは学校のせい、自分がこうなったのは担任と悪い友人のせい、自分は何も悪くない。」そんな話

が聞こえてきました。

私が食事をとっていると、

「お母さん、煙草が欲しいから買ってきて。」

マコトの言葉に自分の耳を疑いました。カーッと頭に血が上り、とっさに手が出ました。日ごろから素直で誠実な人間になるように、何か問題が生じたとき、他人への責任転嫁(他責)ではなく、つねに当事者意識を持ってあたるようにと育ててきたつもりでした。しかし、我が子が発した言葉は私の育て方とは真逆のものでした。

私はその言葉を打ち消したかったのでしょうか。食卓に息子の頭をねじ伏せ、そして、怒りで声を震わせながら「お前何やってんだ。中学の時の卓球に打ち込んでいたお前はどこに行ったんだ。上を目指して頑張っていたあのお前はどこに行ってしまったんだ!自分が弱いことを他人のせいにするんじゃない、勝ちたいなら勝つ努力をしてみろ。泣き言を言って、グレていても、何も答えなど出さない!」大声で息子をねじ伏せ、声を震わせる父親の姿は今思い出してもみっともよいものでは決してありませんでした。

しかし、このことをきっかけに、マコトの行動に変化が現れました。彼は自ら、中学時代のコーチに専任コーチを申し込み、部活が終わった後にそのコーチの指導を仰ぎながら、実力をつけていきました。また、卓球に打ち込む日々を送ることになりました。

〈真剣に向き合うこと〉

成人したのちにマコトはこんなことを語ってくれました。

「中学の時、自分だけが頑張って、全国大会に行けたとばかり思っていたんだ。でも、毎日の練習や遠征の送り迎えをしてくれたり、試合の度に応援に来てくれたのも両親だった。お父さんに叱られた時、そのことに気づいたんだ。でも、本当は「気づいた」のではなく、「求めている」のではないかと思います。

普段から仕事中心の生活で子供に目を向けることの少な

かった父親にもっと自分を見てもらいたかった。「お父さん、もっと僕のことを見て!」そんな気持ちをキャッチしてほしかった。

私の場合、もし、感情に任せてとったあの時の行動が、子ども自身ではなく世間に向いていたとしたら、マコトはこれまで以上に親に反発し、さらに道を外していたのではないかと思います。親は、“真剣に子どもと向き合うこと”しかできません。そして、それは親としての評価や世間への体裁を気にしてぶつかり合うことではありません。「親は自分のことを真剣に考えてくれていたんだ。」と気づいたとき子ども

もは未来に向けて、自分が本当にやりたいこと、やらなければいけないことに目を向け始めるのでしょう。

この時の出来事は「自立※」という意味をしっかりと教える良い機会になりました。

我々は親として、時に上司として、子どもや部下に対して真剣に向き合う勇気と、相手を敬い、受け入れる寛容さを持つことで、子どもや部下との信頼を築くことで、自立や成長を促すことができる。これが人を育てる本質であると感じました。

文責:奥野 康生

※自立について ・「自立」とは

自らの人生や仕事において、「自分が選択している」という意識があり、その選択に責任を持っていること。

「自立した人」とは 一人ひとりが自分で考え、壁を乗り越える力を身につけていること。何か問題が生じたとき、他人への責任転嫁(他責)ではなく、つねに当事者意識を持ってあたること。

#### 【夢をかなえる子育てのための 14 箇条】(自立型支援方法より)

- 1 この子の人生の主人公はこの子であることを忘れない
- 2 どのようなことも、この子にとっては常に最善を選択してきた結果であると意識する
- 3 思い込みを一旦はずす
- 4 会話・関わりの意図を意識する
- 5 子どもの可能性を開き続ける
- 6 子どもの思いをまずは聴く・知る
- 7 考える場を一緒に作る
- 8 褒めるだけでなく認める
- 9 自信構築の為に、責任をとる経験を奪わない
- 10 失敗したと感ずることも、常に学びの種に変え、支援する
- 11 親の体験や助言は子どもの選択だと意識して提案する
- 12 謝る勇気を持ち、誠実に関わる
- 13 常に勇気をくじかない
- 14 待つ!



〒654-0067

神戸市須磨区離宮西町 1-2-20-104 NPO 法人マザーズサポーター協会

「NPO 法人マザーズサポーター協会 ニュースレター 第 38 号」をお読みいただきありがとうございました。過去に情報提供のご希望があったみなさまに、送付させていただいています。今後も更に内容を充実させ、育てる側に役に立つ「自立型支援方法」の情報やイベントのご案内などを発信させていただきます。NPO 法人マザーズサポーター協会 <http://m-supporter.com> fax:078-731-0615

本文イラスト:PIXTA タイトルイラスト:NPO 法人マザーズサポーター協会 HP

